

MEI NO HAMA

姪浜遺跡4

—姪浜遺跡第5次調査報告—

2013

福岡市教育委員会

MEI NO HAMA

姪浜遺跡4

福岡市埋蔵文化財調査報告第1209集



調査番号 0631

調査略号 MNH-5

2013

福岡市教育委員会

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市西区姪浜3丁目3381番において発掘調査を実施した姪浜遺跡第5次調査の記録を収録したものであります。

調査の結果、弥生時代から中世にかけての集落が確認され、長きにわたって本地域が発展し続けた事を示す良好な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました地権者様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長　酒井龍彦

例　　言

1. 本書は西区姪浜3丁目3381番地内において、個人による共同住宅建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課が平成18年度に実施した姪浜遺跡第5次調査の調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告書作成は、福岡市補助金適用規定にある、個人による事業の短期調査に該当する補助事業として行った。
3. 本書で用いる方位は磁北で、座標北はこれに $6^{\circ} 0'$ 西偏する。
4. 調査区は、予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は北西交点とした。
5. 遺構の呼称は略号化し、竪穴住居→SC・土壙墓→SR・土壤→SK・柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。
7. 本書に使用した遺物実測図は相原聰子による。
8. 製図は加藤・米倉則子による。
9. 本書に用いた写真は加藤による。
10. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
11. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 調査区の立地と環境	2
III. 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 弥生前期の調査	6
3. 中世の調査	14
IV. 小結	17

挿図目次

Fig.1 調査区位置図 (1/4,000)	3	Fig.2 調査区周辺測量図 (1/500)	4
Fig.3 遺構全体図 (1/100)	5	Fig.4 SC09・12 実測図 (1/60・1/40)	7
Fig.5 SC09 出土遺物実測図.1 (1/3)	9	Fig.6 SC09 出土遺物実測図.2 (1/3)	10
Fig.7 SC09 出土遺物実測図.3 (1/3)	11	Fig.8 SC09 出土遺物実測図.4 (1/3)	12
Fig.9 SK01・SR10 実測図 (1/40)	13	Fig.10 SR10 出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig.11 混入遺物実測図 (1/3)	13	Fig.12 SK03・04 実測図 (1/40・03 = 1/60)	14
Fig.13 SK05・06・08・11 実測図 (1/40)	15	Fig.14 SK03・05・06・08・11 出土実測図 (1/40)	15

写真目次

PL. 1 1. 調査区全景 (南から)	18
2. SC09・12 (南東から)	18
PL. 2 1. SC09 土器溜まり (南から)	19
2. SC09 濾形土器出土状況 (南から)	19
3. SR10 検出状況 (西から)	19
4. SR10 主体部 (西から)	19
5. SK04 土層断面 (東から)	19
6. SK05 (西から)	19
PL. 3 1. SK11 土層断面 (南から)	20
2. SK11 (南から)	20
3. 出土遺物. 1	20
Ph. 4 出土遺物. 2	21

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市西区姪浜3丁目3381番において、個人による共同住宅建設の計画に当たり、平成18年4月21日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財第1課に提出された事により始まる。申請面積は245.62m²、受付番号は18-2-96である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、申請地が姪浜遺跡の範囲内であり、内容など状況を把握するため同年5月15日確認調査を実施し、その結果表土下60～80cmで弥生時代の土壙・柱穴など多くの遺構・遺物を検出した。西方沖地震以前は築150年の町家があった場所で、遺構の遺存状況は非常に良好と考えられた。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。よって遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して記録保存のため発掘調査を実施する事となり、調査は国庫補助金を適用して実施した。

発掘調査は平成18年7月12日に着手、同年8月7日に全ての行程を終了した。

調査番号	0631	遺跡略号	MNH-5
調査地地籍	西区姪浜3丁目3381番	分布地図番号	89(姪浜)0367
開発面積	245.62m ²	調査実施面積	143m ²
調査期間	060712～060807	事前審査番号	18-2-96

2. 調査の組織

18年度 【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子

【調査総括】文化財部長 山崎純男 埋蔵文化財第2課長 力武卓治

調査第1係長 池崎譲二

【調査庶務】文化財管理課 後藤泰子

【発掘調査】埋蔵文化財第2課調査第1係 加藤良彦

【発掘作業】松尾和子 川嶋京子 芦馬光夫 橋口スミ子 柴藤清志 西納富士夫
青木和代 青木真孝 佐藤直利 三村悦子 染井美保子 野田英機

24年度 【整理主体】福岡市教育委員会 教育長 酒井龍彦

【整理総括】経済観光文化局文化財部長 藤尾浩 埋蔵文化財調査課長 宮井善朗

調査第1係長 常松幹雄

【整理庶務】埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子

【整理担当】埋蔵文化財審査課事前審査係 加藤良彦

【整理作業】国武真理子

II. 調査区の立地と環境

姪浜遺跡は、早良平野の博多湾西海岸部、室見川左岸の愛宕山や小戸丘陵など点在する第三紀層由来の丘陵間をつなぐ様に形成された古砂丘・新期砂丘上に、東西 700 m 南北 300 m の範囲に広がる。調査区は姪浜遺跡の南寄り中央、砂丘尾根線上にもうけられた旧唐津街道北側に位置する。

歴史を概観すると、本遺跡古砂丘上では旧石器が採集され、新期砂丘上には弥生時代の集落と墓群が広がり、砂丘後背の低地部には橋本一丁田遺跡・福重稻木遺跡・石丸古川遺跡など、突帯文から板付式土器を出土する初期農耕遺跡が分布する。砂丘南の第三紀層独立丘陵上には箱式石棺から二神二獸鏡・銅鏡等を出土した古墳前期の五島山古墳が立地している。中世鎌倉期の文献には「肥前国役所姪浜警固番役」と地名が初見し、東側 300 m 程の興雲寺山上には九州探題渋川氏の城址、1000 m 程の愛宕山には鎮西探題、北 400 m 程の小砂丘上には元寇防塁推定地があり、中世史上の重要な遺跡が分布する。近世には長崎・平戸へと通じる唐津街道の、筑前二十一宿の一つに数えられる宿代官が置かれた。また、茶屋、本陣と称した藩主の別館が置かれ、お茶屋奉行が置かれた。製塩も盛んで、元禄年間に塩浜奉行が置かれ、慶長年間には酒造が始まり、芦屋から鉄物師が移り住んで鋳造業も始まる、漁業・廻船・製塩・産業・交通で栄えた地域であった。

これまで遺跡内では 4 次にわたって調査が実施され、1 次調査では旧道に面した店舗新築工事中に弥生時代中期後半の壺棺 2 基が出土、調査以外に 8 基以上有ったとされる。棺副葬の可能性がある磨製石剣の完形品 1 点がある。2 次調査では旧道の下水道敷設工事に伴って、1 次調査から続く數十基の甕棺を検出。また、古墳の石室と考えられる遺構も出土している。3 次調査では道路拡幅に伴って、古墳時代後期の竪穴住居と弥生時代中期前半の竪穴住居・土壙が検出され、遺構から中国漢代式三角銅鏡・半島系無文土器・西部瀬戸内土器・南海産貝輪・貝玉等の海上交易品と多量の製塩土器が出土し注目されている。石器製作も行っており、擦り切り技法による石剣未製品や多くの石錘の出土が特徴である。古墳時代には 11 軒の竪穴住居が検出され、窓廐棄時に蛸壺を埋納している。また、古砂丘に伴う旧石器時代の尖頭状石器を検出している。4 次調査は本調査区から 60 m 程西の、自宅兼共同住宅の工事に伴って、弥生時代中期の竪穴住居の可能性がある大形土壙 2 基・土壙 11 基・溝 2 条・甕棺 5 基・中世土壙 1 基を検出し手いる。大形土壙からは 3 次調査区同様に多くの石錘が出土しており、弥生時代中期において、海に因った漁撈と製塩、海洋交易を示唆する遺跡である。

本調査区の発掘調査の経過としては、7 月 12 日・13 日に重機による北半部の表土剥ぎを実施し、14 日より作業員 12 名を導入し遺構検出を開始した。19 日～25 日にかけて梅雨の大雨で現場作業の大半を中断。25 日より弥生時代の大型住居 SC09 を掘削、多くの土器・石器を検出した。28 日に掘り上がり、北部の全景を撮影、8 月 2 日に測量・実測を完了し、同日反転して南部の表土剥ぎに着手。遺構検出・掘削を開始し、4 日に南部全景を撮影、測量・実測を完了。同日午後調査機材を撤収し調査を完了している。

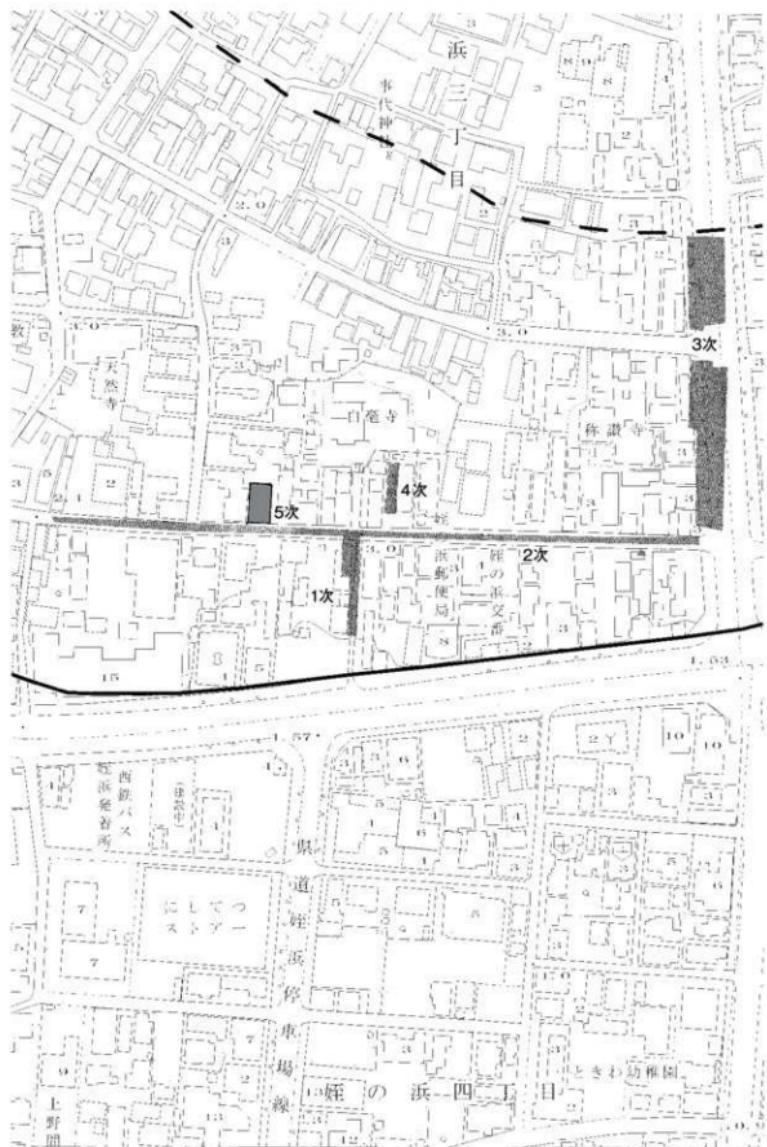


Fig.1 調査区位置図 (1/2000)

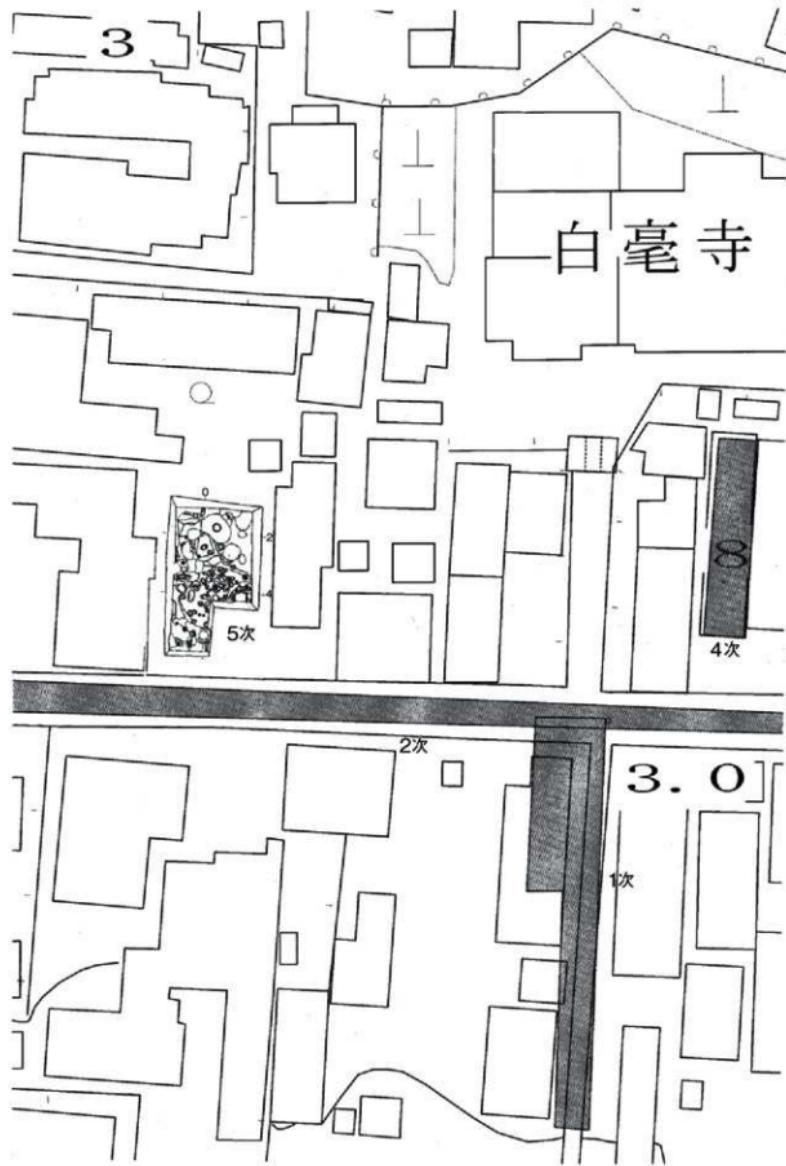


Fig.2 調査区周辺測量図 (1/500)

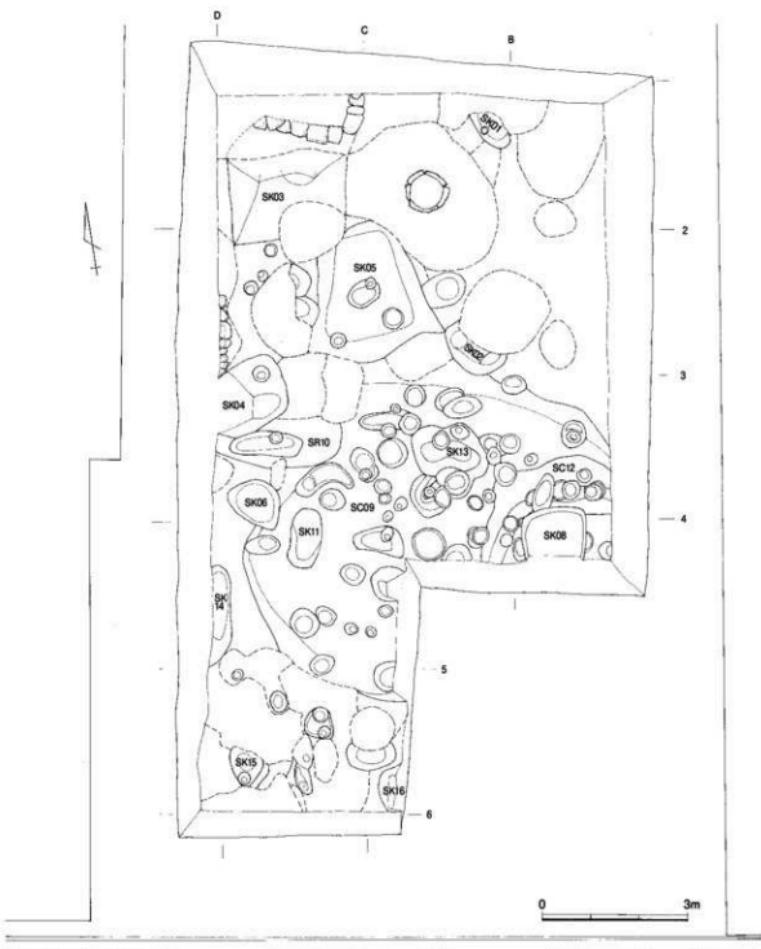


Fig.3 遺構全体図 (1/100)

III. 調査区の記録

1. 調査の概要

調査区は砂丘尾根線から北緩斜面に位置し、南端で GL - 60cm、北端で - 70cm 下で黄灰色砂の基盤層に達する。試掘時には、当該区が築 150 年の木造民家の跡地であり、良好な遺存状態の遺構の検出が期待されたが、想像以上に近世以降の搅乱が多く、遺構は寸断されている。

基本層序 (Fig. 4) は、30cm 程の搅乱層下、30cm 程の暗茶褐色砂質土 (5 層) の弥生時代包含層の堆積があり、基盤層の砂層にいたる。部分的に、上位に黒褐色砂質土の弥生時代覆土 (4 層)、暗褐色砂質土の中世覆土 (1 層) が見受けられ、近世に削平されるまでは中世の包含層、遺構面が遺存したと考えられる。遺構検出は、搅乱に分断された 5 層上面で試みたが、遺存部分が小面積のため遺構が判然とせず、結局基盤層上面で確認した。

検出した遺構は、弥生時代中期後半の竪穴住居 2 棟・土壙 2 基、後期初頭の石蓋土壙墓 1 基、12 世紀後半～15・16 世紀代の土壙 10 基と、多数の柱穴で、遺構の密度は高い。中世の柱穴は径 30cm 前後で小振りであり、弥生時代は径 50cm を越える大形のものが多い。他には近世後期の廃棄土壙 6 基・土蔵と思われる砂岩割石積み基礎 2 基、近代廃棄土壙・砂岩板石組み井戸である。

弥生時代中期後半の竪穴住居 2 棟は廃絶後、土器等の廃棄場となっており、多量の遺物が出土している。弥生時代後期の石蓋土壙墓は扁平な玄武岩割石を蓋石に用い、副葬品は検出されなかった。

遺物は、弥生時代中期後半の方形竪穴住居 SC09 を中心に、遺構から多くの日常土器・祭祀土器と石器・碧玉製管玉・獸骨を、15・16 世紀代の土壙からは瓦質の湯釜・朝鮮陶磁器・中国白磁などを検出。博多や他の中世館出土品と遜色ない資料を出土している。他に古墳時代～古代の須恵器、13 世紀代の土師器を少量検出している。遺物はコンテナケース 25 箱分検出している。

2. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構は中期後半の SC09・12 の方形竪穴住居 2 軒を中心なし、周間に小形の土壙 SK01・15 が分布する。竪穴住居は廃絶後には土器廃棄場所となり、中期後半～末の土器を中心とする多量の遺物が廃棄されている。東 50 m 程の第 3 次調査区も同様の様相を示しており、周辺が中期後半～末の集落の中心域と考えられる。後期初めには住居を切って石蓋土壙墓 SR10 が営まれる。

1.) 竪穴住居

SC12 (Fig. 4 PL.1-2) B 4 グリッドに位置し、竪穴住居 SC09 に切られ、これの床面で検出された。方形竪穴住居の壁溝北西隅部分の検出であり、大部分は調査区外に広がる。溝は幅 110cm 深さ 20cm 程で、地山の黄灰色砂の中ブロックを 3/4 含む暗灰色砂質土 (8 層) で埋まる。遺物は中期後半の少量の弥生土器甕・壺片、丹塗広口壺・鉢片、玄武岩剥片などが出土している。

SC09 (Fig. 4 PL.1-2・2-1-2) C2 グリッドあたりに位置し、今回の調査の中心をなす遺構である。平面 7.2 × 6.0 m + a、土層断面で深さ 70cm を測る方形竪穴住居で、砂の地山のため上端は流れで丸みを帯びるが、下端は方形に巡る。柱穴が多く、主柱穴を絞り込めないが径 80cm 程の大形の柱穴がこれに相当すると思われるが、配置に規則性は見いだせない。SK13 は屋内土壙である。住居廃絶後 40cm 程暗茶褐色砂質土と暗黃灰色砂との厚さ 1 ~ 3cm の互層が堆積 (7 層一下層として取

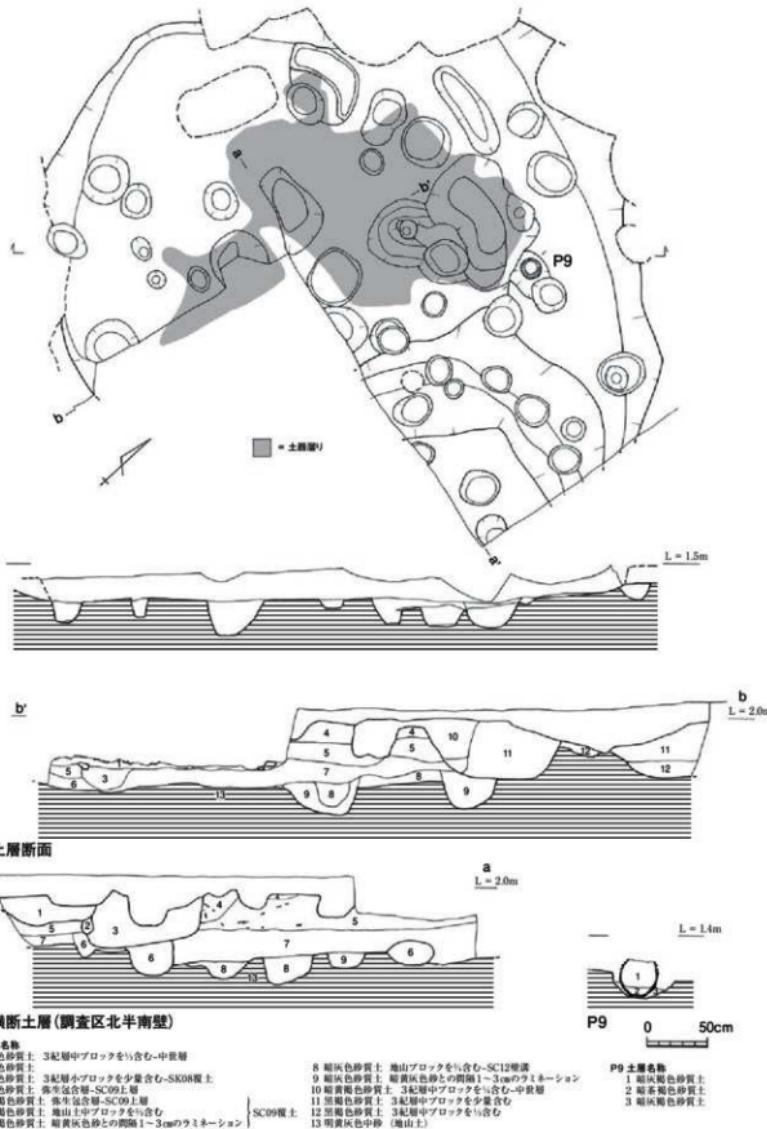


Fig.4 SC09・12 実測図 (1/60・1/40)

り上げ)、さらに暗茶褐色砂質土・黒褐色砂質土(4・5層一上層として取り上げ)が堆積し、この上層堆積時に全出土遺物の7~8割を占める多量の土器をはじめとした遺物が廃棄される。

出土遺物 (Fig.5~8 PL3-3・PL4) 下層からは中期後半の遺物が少量出土する。弥生土器壺・跳ね上がり口縁壺・壺蓋・壺・鉢・支脚・丹塗壺・壺・高坏・鉄片・土器片円盤・石製円盤・磨石・叩石・玄武岩剥片・花崗岩割石・旧石器剥片・獸齒が出土。43は丹塗袋状口縁壺。袋径10cm。口唇内面から外面に丹塗り。外面袋部ヨコ以下タテケンマ。44は口径22cm丹塗広口壺。外面に薄く口唇から内面に濃く丹塗り。口縁外面下にタテ粘土帯。47は口径26.7器高35.0cmの壺。外面は粗いタテハケ。器壁が薄く剥離する。52は小形脚付土器。体部の全周を打ち欠く。底径2.7cm。古墳前期の製塩土器の脚に似る。54は鉄片。32×14×4mm 7gを測る。62は玻璃質安山岩製の旧石器縦長剥片。風化により淡緑灰色を呈するが、断面は灰色。55×25×11mmを測る。裏剥離面に2面縦長剥離面がある。花崗岩割石は16点出土し、一辺5cm前後の直方体で飛碟か石錘と考えられる。

Fig.5~8は上層、土器溜まりを中心とした出土遺物。弥生土器壺・壺・鉢・器台・支脚・壺蓋・壺棺片・丹塗壺・壺・袋状口縁壺・無頭壺・瓢形土器・土器片円盤・土器片鍤・叩石5点・磨石4点・石鍤5点・砥石1点・飛碟状花崗岩割石16点・玄武岩割石69点・未製品1点・母岩1点・黒曜石剥片1点・碧玉製管玉1点・原石1点・鉄片3点・獸齒を検出している。1はC3グリッド・径50cm程のSP内に胴部下半を埋め込んで据えた丹塗瓢形土器。口縁部を全周打ち欠く。内部1/3程には5層土が溜まり器壁に炭粒が付着する。土は水洗したが何も検出できていない。底径11.9器高30.2cm。2960g。外面上半に薄く丹塗り。下半に飛沫が散る。ナデ後緩いケンマ。内面タテ板ナデ後ヨコナデ。黄橙~橙色。2は丹塗無頭壺蓋。口径15.8器高3.3cm。口縁上に2.1cm間隔の2孔を焼成前に対面に穿孔。外面に薄い丹塗り後放射状のタテケンマ。内面ヨコハケ・ヨコナデ後緩いケンマ。灰黄褐~黄橙色。3は鋤先口縁壺片。胴径20.7cm。外面ヨコナデ後緩いケンマ。突帯下にハケ工具の連続当痕。内面指頭圧痕後ヨコ・ナメナメナデ後緩いケンマ。暗黄橙~暗灰黄色。4は丹塗壺胴部片。胴径34.4cm。外面上位に丹塗り。上位ヨコハケ・ヨコナデ後緩いケンマ。2cm間隔のタテ暗文を施す。下半タテハケ・ヨコナデ後緩いケンマ。内面指頭圧後タテ板ナデ後ヨコナデ。暗黄橙色。42は鋤先口縁壺。口径28cm。外面タテハケ後ヨコナデ。胴中位に2条のM字突帯。45は鉢。口径18.3器高10.6cm。外面粗いタテハケ内面ヨコハケ後ヨコナデ・ケンマ。46は器台で完形。口径8.5器高10.3cm 496g。外面タテ板ナデ後ナデ。5~8は支脚。10個体以上が出土している。いずれも外面タテ板ナデ後粗いヨコナデ底面に藻状敷物圧痕。5は口径7.8器高16.5cm。上半部が被熱。橙~淡黄色。6は完形。口径9.35器高17.2cm 1341g。一側面が被熱。黄橙~灰黄色。7は口径8.9cm。橙~暗黄橙色。8は底径11.4cm。暗黄~橙色。9~19・48~51は壺。9は豊前系跳ね上がり口縁。口径26.2cm。外面タテハケで下半が被熱で薄く剥離。暗褐~暗黄橙色。他に6片出土している。10は口径31.0cm。口縁内面が稜をなす。外面に粗いタテハケ。暗黄橙~暗灰黄色。11は口径24.3器高30.3cm。外面口縁下に低い三角突帯、以下にタテハケ。下半は被熱で荒れる。暗黄褐~灰黄褐色。12は口径25.1cm。口縁内面ヨコハケ後ヨコナデ。外面にやや粗いタテハケ。暗黄橙~灰黄褐色。13は口径28.5cm。内面ヨコナデ後緩いケンマ。外面にやや粗いタテハケ。下半は被熱で荒れる。暗黄橙~灰黄褐色。14は口径31.1cm。内面ヨコナデ後緩いケンマ。外面口縁下にやや粗いヨコハケ、以下タテハケ。黄灰~暗黄橙色。15は口径28.5cm。内面ヨコナデ後緩いケンマ。外面タテハケ。浅黄~灰黄褐色。16は口径31.6cm。外面やや粗いタテハケ。口唇に浅い刻目。淡黄~暗灰黄色。17~19は底部。いずれも薄い平底で外面タテハケ、脇にくびれが残る。17は底径8.3cm。内面ナメ板ナデ後ヨコナデ。18は底径8.8cm。外面に粗いタテハケ。19は底径9.2cm。外底に種子圧痕。48はほぼ完形。口径28.3器高33.4cm 2160g。外面粗いタテハケ、下半に煤付着。49は製塩土器。口径23.5cm。内外とも板状に激しく爆ぜ、桃色に発色。50は口縁内面に3本単位の焼成前のハケ工具沈線。51は底径9.2cmの内底に焼成前の径2.5cmの深さ4mmの凹み。53~56は鉄片。53は34×33×10mm 23g。鉄斧片か。55は42×23×5mm 14g。

縁がある。56は $32 \times 25 \times 12\text{mm}$ 17 g。鉄斧片か。57は碧玉製管玉。15mm径 6mmの体部の双方から径3mmの穿孔、2 g。58は砂岩製下振形石錘。13.0 × 4.5 × 3.6cmの円柱状の円礫を幅1.8厚1.2cmのT字に紐掛け部を削り出して成形。269 g。下面是敲打で平らに減る。59は砂岩円礫製切目石錘。8.0 × 5.1 × 3.1cmの円礫の十字方向に敲打後磨りで紐掛けの切目を成形する。171 g

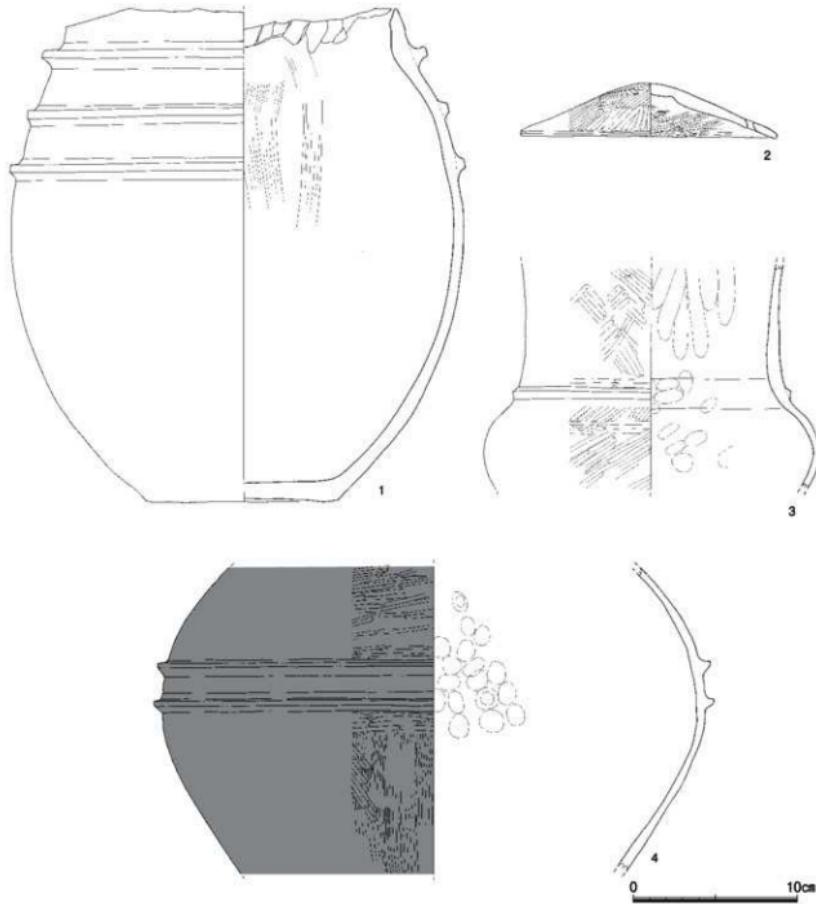


Fig.5 SC09 出土遺物実測図 1 (1/3)

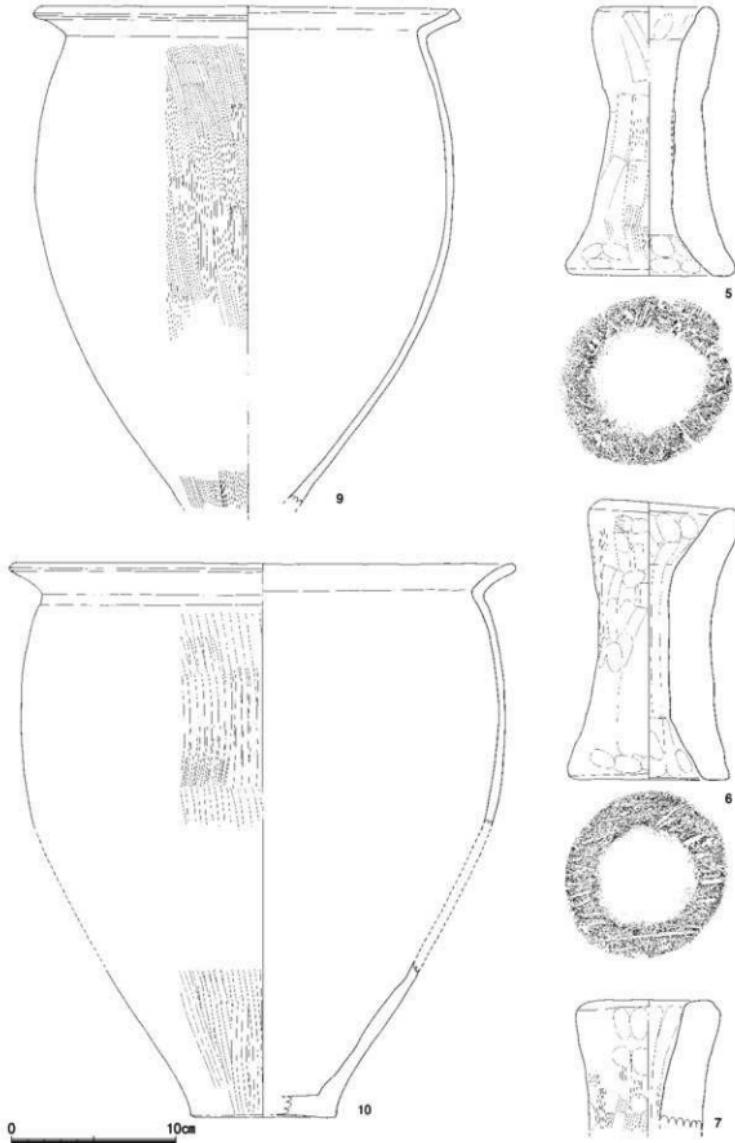


Fig.6 SC09 出土遺物実測図 2 (1/3)

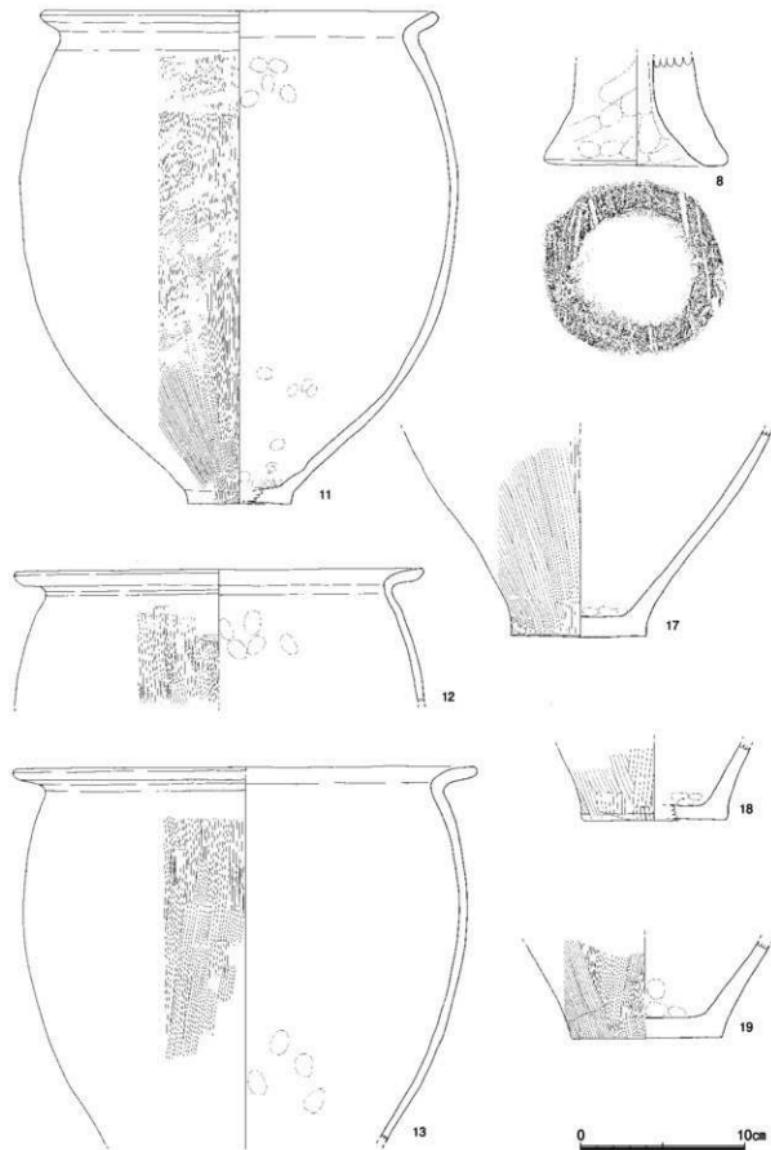


Fig.7 SC09 出土遺物実測図 3 (1/3)

2.) 土壙 SK02 (Fig.9) C1 グリッドに位置し、大半を搅乱に切られる。南西隅が遺存し、平面隅丸方形で $95+a \times 50+a$ 、船底形断面で深さ 20cm を測る。土層は床上に暗茶褐色砂質土混じりの地山崩落土、上層に暗茶褐色砂質土が堆積する。遺物は中期後半の甕・壺・支脚の小片が數十片出土する。

3.) 石蓋土壙墓 SR10 (Fig.9 PL - 2 - 3 - 4) D3 グリッドに位置し、住居 SC09 を切る。北半部と上面を中世 SK04・搅乱に切られる。 $250+a \times 100+a$ 深さ 40cm の東が広い長梢円形の掘方に 150×48 深さ 23cm の若干東が広がる主体部を設ける。頭位は N - 96° - E にとる。上面を $50 \times 40 \times 10$ cm

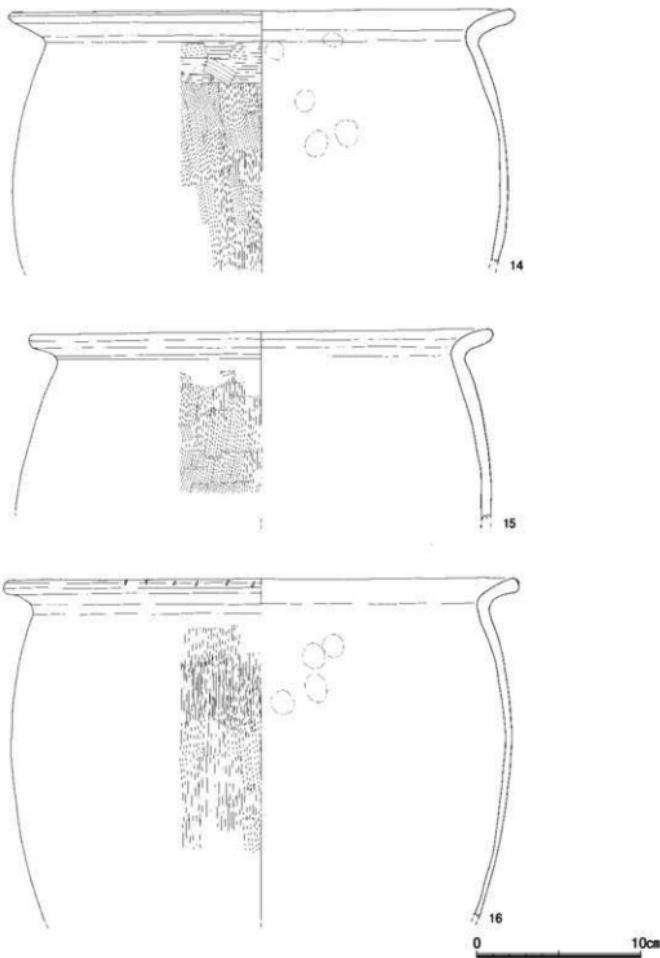


Fig.8 SC09 出土遺物実測図 4 (1/3)

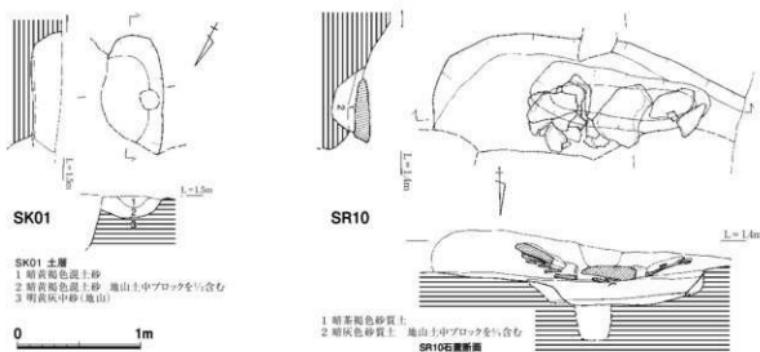


Fig.9 SK01・SR10 実測図 (1/40)

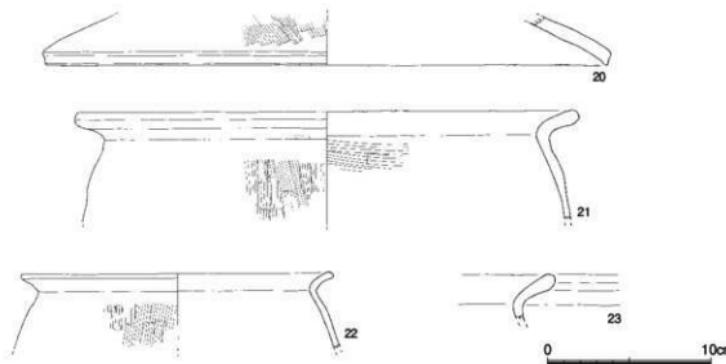


Fig.10 SR10 出土遺物実測図 (1/3)

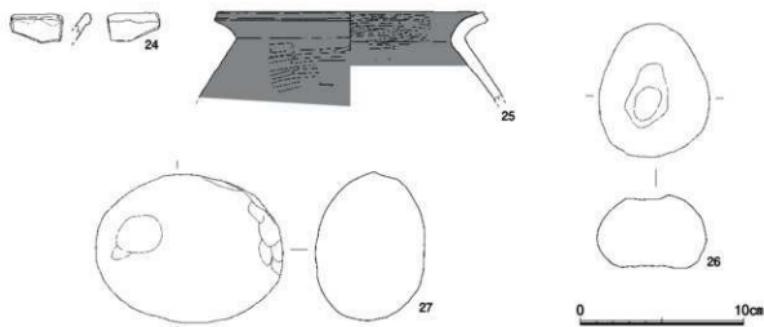


Fig.11 混入資料実測図 1 (1/3)

前後の偏平な玄武岩割石4石以上で覆って蓋とした考えられるが、中世土壤と近代の搅乱により、碎かれ浮き上がって大半が北にずれ、原位置を保っていない。覆土は主体部の大半を地山砂を多く含む暗灰色砂質土(2層)、以上を暗茶褐色砂質土が覆う。副葬品は検出できなかった。

出土遺物(Fig.10)いずれも小片。**20**は筒型器台脚部。径35.0cm。ナナメハケ後ヨコナデ・ケンマ。口唇はハケ工具の凹線。暗橙～暗褐色。21～23は甕。21は口径31.0cm。内面口縁下に粗いヨコハケ・外面にタテハケ。暗黄橙～暗黃褐色。22は石蓋下からの出土。口径19.2cm。薄い器壁で外面にやや粗いタテハケ。黄灰～黒褐色。23は口縁小片。口唇断面は丸い。黄灰色。後期初頭。

4.) 混入資料(Fig.11 PL-4) 後代の遺構に混入した資料である。**24**は半島系甕。無文土器の影響を受け、口縁を丸く折り返す。外面粗いヨコナデ内面ヨコハケ。淡黄～暗黄橙色。**25**は丹塗顎頭壺。口径16.8cm。内外面ヨコナデ後緩いケンマ。口唇に凹線。**26**は花崗岩円礫の凹石。8.2×6.9×4.4cm 346g。全周と片面中央を使用。**27**は砂礫変成岩円礫の叩石。11.3×9.0×6.8cm 1086g。全周に細かな敲打痕、下面に大きな敲打痕をもつ。**60**は全周両面剥離の暗灰色頁岩石包丁再加工未成品。86×45×6mm。上辺に穿孔痕があり、穿孔途中の被損品を小形品に再加工途中のもの。**61**はC3・SP9出土の鉄斧袋部片。現況で34×29×20mm縁取りで厚6mm。14gを測る。

3. 中世の調査

中世の遺構は、土壤10基、SK02・03・04・05・06・07・08・11・14・16のみで、ほぼ弥生時代の遺構を切って全面に分布している。近世近代搅乱土直下の暗茶褐色砂質土弥生包含層上面で、部分的に暗褐～黒褐色砂質土を覆土として検出されるが、近世に切土造成がなされ、遺構面は遺存しない。搅乱が著しいため砂層上面で遺構検出を実施している。時期の中心は中世後期が占める。

1.) 土壤 SK03 (Fig.12) D7グリッドに位置し、近世堆積に切られる。南東隅が遺存し、平面隅丸方形で225+a×135+a、船底形断面で深さ60cmを測る、本調査区で最大規模の中世遺構である。

出土遺物 (Fig.14 PL. 4) 弥生土器・土師器・須恵器の他白磁碗、陶器甕・鉢、瓦質湯釜・擂鉢、

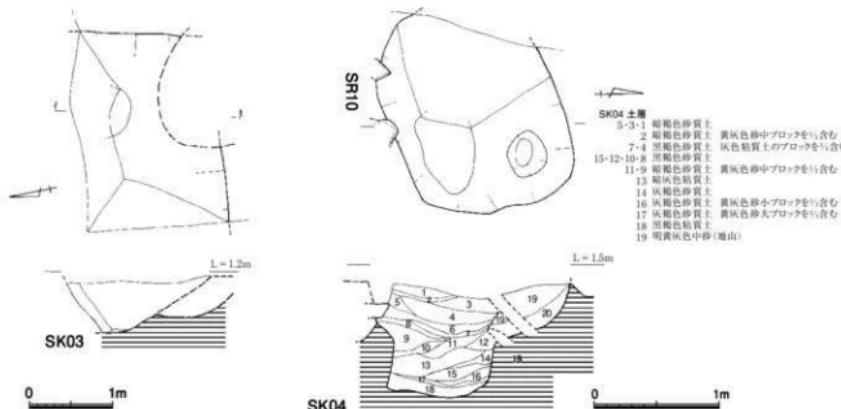


Fig.12 SK03・04 実測図 (1/40・03=1/60)

糸切り土師器坏、土師質擂鉢・鉢、鐵釘、鐵治滓、が出土。28は土師器坏。底径7.3cm。外底糸切り。浅黄～灰黄色。29・30は瓦質湯釜。29は取手部分のみ。取手の中央に径7mmの焼成前の穿孔。外面ケンマ灰色に銀化。断面黒灰色。内面ヨコハケ後ヨコナデ。30は口径16.8cm。内外面ヨコナデ。内面取手縁部分に押圧痕。他に菊花文・四ッ菱文を印花する2個体がある。63・64は明青花。63は碗。呉須で外面に花文を描く。64は高坏。外面に略化したラマ式連弁と花文を描く。15～16世紀。

SK04 (Fig.12 PL.2~5) D3 グリッドに位置し、土壤幕SR10を切る。北西部が調査区外にある。平面隅丸方形で $235+a \times 200$ 、断面で皿状の深さ65cmと径120深さ80cmの円筒形の2段になる。円筒の壁に沿う木質は無く、井戸ではない。暗褐色砂質土と黒褐色土・粘土との互層で堆積しており、汚水等の排水施設の可能性がある。

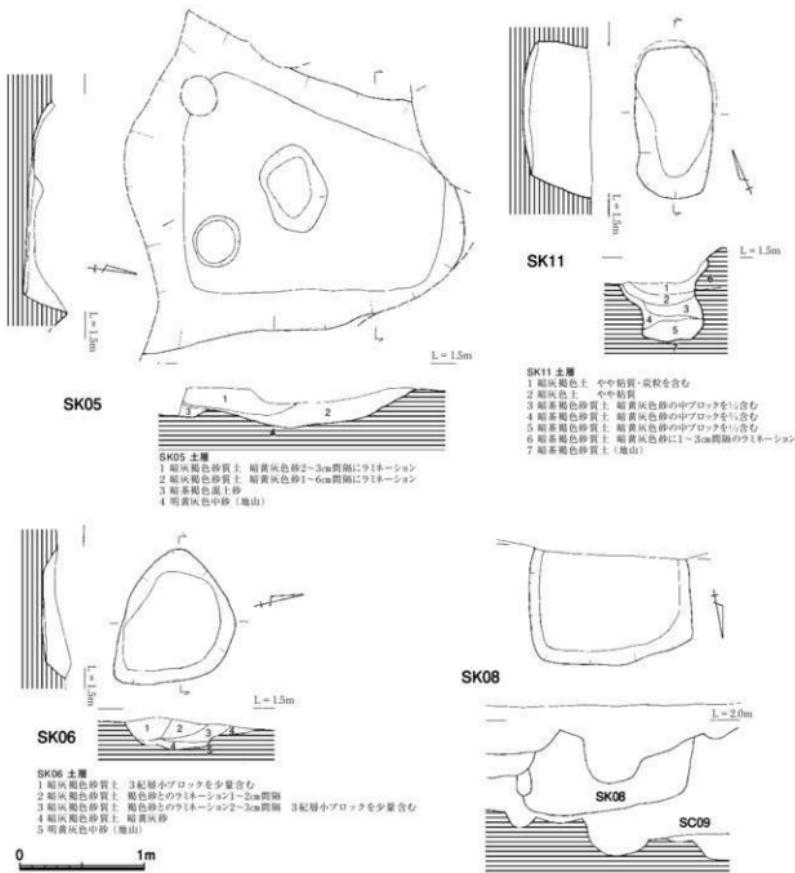


Fig.13 SK05・06・08・11 実測図 (1/40)

出土遺物 遺物は弥生土器・土師器SR10蓋石の他、白磁小碗、青白磁碗、龍泉窯系青磁鐔縁皿、陶器擂鉢、糸切り土師器坏、土師質鍋、鍛冶津、炉壁、炭が出土している。15～16世紀。

SK05 (Fig.13 PL2-6) D2 グリッドに位置し、大部分を SK07 と搅乱に切られる。平面隅丸台形の大形の土壤で、 $256+a \times 285+a$ 、断面皿状で深さ 23cm を測る。暗茶褐色砂質土と暗茶褐色砂・暗黄灰色砂との互層の風成層で埋まる。

出土遺物 (Fig.14) 遺物は弥生土器の他、瓦質擂鉢、糸切り土師器坏・皿、鉄釘、石製鍋、砥石が出土している。31・32 は瓦質擂鉢。31 は平坦な直口口縁の内外が張り、内外ヨコナデ後内面に 3 本単位の擂目を施す。32 は口縁が短く屈折して立ち上がる。外面タテハケ後ヨコナデ口縁内面に凹線後ケンマ・擂目を施す。33・34 は土師器。33 は坏。底径 7.4cm。外底糸切り。暗黄橙色。34 は皿。口径 7.2 厘米高 1.2cm。外底糸切り。暗黄橙色。35 は砾岩製の石鍋。径 40cm 程か。平坦口縁で厚 2.4cm。

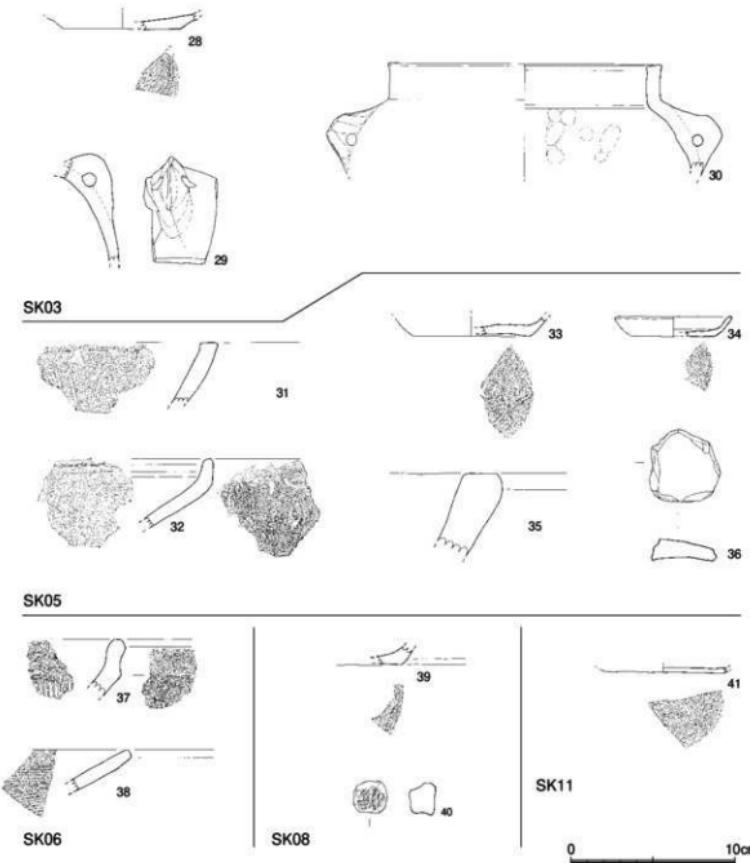


Fig.14 SK03・05・06・08・11 出土遺物実測図 (1/3)

被熱し、外面に煤付着。36は土器片円盤。丹塗り土器片を転用し、全周を打ち欠きで成形。40×40×10mm 23gを測る。16世紀。

SK06 (Fig.13) D3グリッドに位置し、SC09を切る。平面不整円形の土壙で、105×92、深さ23cmを測る。地山の崩落土が堆積後、暗灰褐色砂質土と褐色砂との互層の風成層で大半が埋まる。上面は三紀層の小ブロック混じりの暗灰褐色砂質土で埋める。

出土遺物 (Fig.14) 遺物は弥生土器の他、瓦質鍋、土師質擂鉢・鍋、糸切り土師器坏・皿が出土している。37は土師質擂鉢。口縁が短く屈折し外反して立ち上がる。外面タテヘラナデ後ヨコナデ内面ヨコナデ後5本単位の擂目を施す。暗黄橙色。38は瓦質鍋。薄い器壁で、口唇に凹線。外面ヨコナデ内面ヨコハケ目。黒灰色。15～16世紀。

SK08 (Fig.13) B4グリッドに位置し、SC09・12を切る。平面方形の土壙で、南半が調査区外にある。132×95+a、深さ70cmを測る。三紀層の小ブロック混じりの黒褐色砂質土の單層で埋める。

出土遺物 (Fig.14) 遺物は弥生土器の他、青磁龍泉窯系I類碗・同安窯系I類碗、糸切り土師器坏・碗、瓦玉が出土している。39は土師器坏、外底糸切り。浅黄橙色。40は繩目叩き瓦素材の瓦玉。16×17×11mm 8gを測る。全周を打ち欠き後一部磨りで成形。12世紀後半。

SK11 (Fig.13 PL.3-1・2) D4グリッドに位置し、SC09を切る。平面長方形の土壙で、123×63、深さ65cmを測る。下半は地山土混じりの暗茶褐色砂質土で埋め、上位に暗灰褐色粘質土が堆積する。

出土遺物 (Fig.14) 遺物は弥生土器の他、朝鮮白磁、東播系捏鉢、糸切り土師器坏・皿が出土している。41は土師器坏。底径7.3cm。外底糸切り。黄灰色。15～16世紀。

2.) 混入その他の資料 (PL-4)

65はB3・SP2出土の朝鮮粉粧沙器の瓶片。外面胴部に印花後白土を掛け沈線3条はカキ落として表現する。66は撹乱出土の管状土錘。47×13・孔径3mmで9gを測る。下面が摩滅する。他に撹乱より朝鮮雜釉瓶の口縁部片が出土している。

IV. 小結

今回の調査では、弥生時代と中世の遺構を検出した。

弥生時代は中期後半の方形堅穴住居住居2軒と土壙2基、後期初頭の石蓋土壙墓1基を検出した。弥生時代中期後半の生活遺構群のうち、SC09は同様の様相を示す、東50m程の第3次調査区の住居と考えられる大形土壙2基とともに、周辺が本調査区の南から東部の砂丘稜線上の甕棺墓群を形成した中期後半～末の集落の中心域と考えられ、大量の土器はこの住居を廃絶後投棄したもので、SC09床面には瓢形の特殊土器を胴下半を埋め込み設置している。SC09に切られる住居SC12は同期と思われる。遺物としては製塩窯と多量の支脚の出土が製塩業を暗示するが、中期初頭の3次調査の出土ではない。石錘・玄武岩の剥片も多く出土し、これも3次調査の様相と重なる。撹乱からの出土ではあるが擦り切り痕を残す頁岩の砥石も出土している。24の半島系土器の出土もこれを引き継ぐものである。後期初頭には墓域となっている。

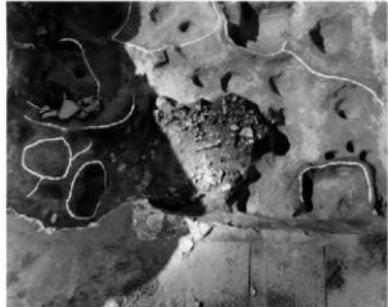
中世は、12世紀後半の土壙2基と15・16世紀の土壙8基を検出した。多くの柱穴は建物を成すと考えられるが撹乱が著しくまとまらない。15・16世紀の遺物は湯釜、中国・朝鮮貿易陶磁が出土し、周辺の中世館出土品と遜色がない。鍛冶溝の出土も工房の存在を示している。



1. 調査区全景（南から）



2. SC09・12（南東から）



1. SC09 土器滿まり（南から）



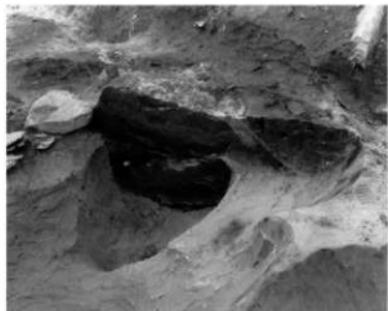
2. SC09 瓢形土器出土状況（南から）



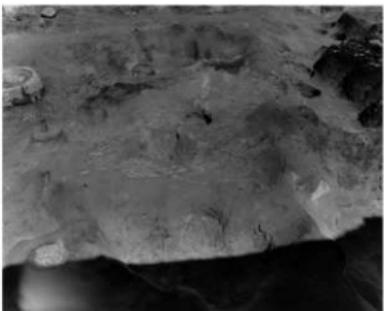
3. SR10 検出状況（西から）



4. SR10 主体部（西から）



5. SK04 土層断面（東から）



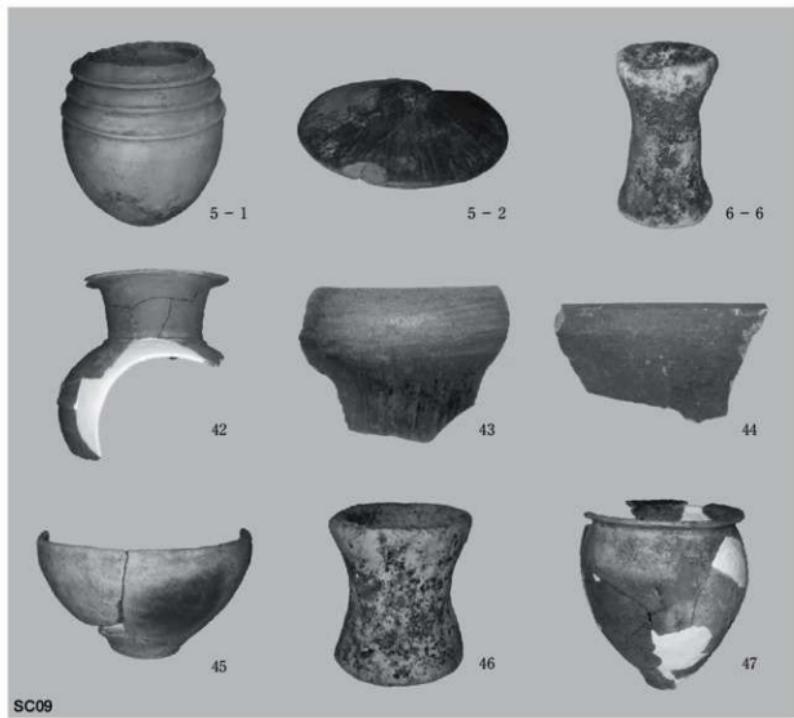
6. SK05（西から）



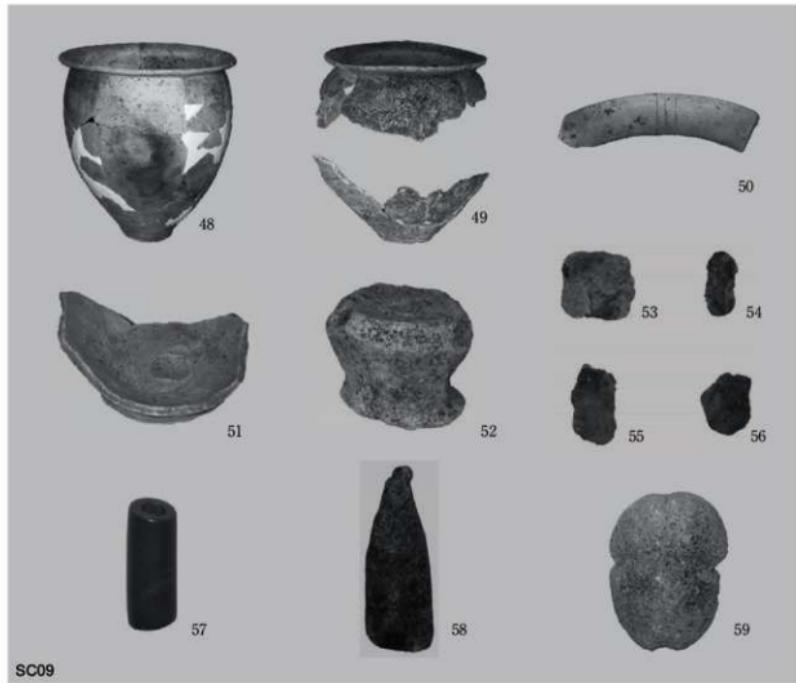
1. SK11 土層断面（南から）



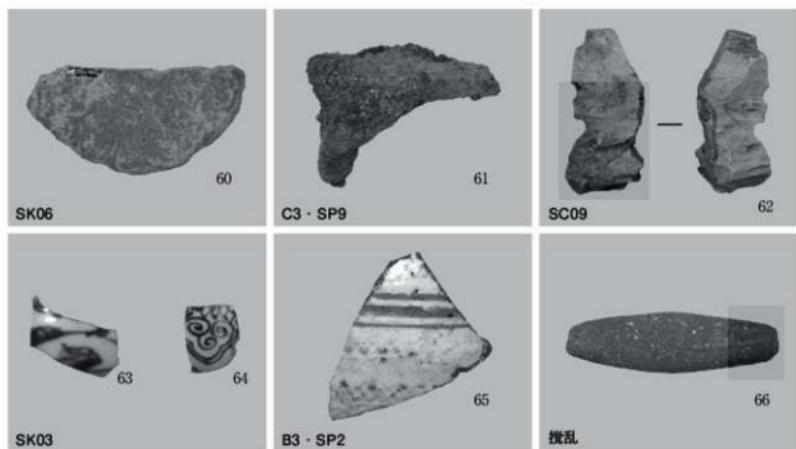
2. SK11 (南から)



出土遺物 1



SC09



出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	めいのはまいせき						
書名	姪浜遺跡 4						
副書名	姪浜遺跡第5次調査報告						
巻次	4						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1209						
編著者名	加藤真彦						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	20130322						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
姪浜遺跡 第5次	福岡市西区 姪浜3丁目 3381番	40135	0367	33° 35' 18" 130° 19' 32"	20060712 20060807	143	共同住宅
種別	集落・墓地						
主な時代	弥生・中世						
遺跡概要	遺構	弥生時代中期：堅穴住居2・土壤2・石蓋土壤墓1 中世：土壤10					
	遺物	弥生時代：弥生土器・瓢形土器・製塙甕・半島系無文土器・石鎌・石包丁・磨石・叩石・石錘・碧玉管玉・鉄片 古墳時代～古代：土師器・須恵器 中世：中国朝鮮貿易陶磁器・土師器・土師質土器・瓦質土器湯釜・石鍋・鍛冶滓					
特記事項	堀柵墓地に近接した弥生時代堅穴住居の床に埋め込んだ瓢形土器が出土。廃絶後の土器溜まりから多量の土器と製塙甕、碧玉管玉・鉄片が複数出土。 15・16世紀を中心とした土壤から中国朝鮮貿易磁器・湯釜4点以上・鍛冶滓が出土し、集落の中心域で有ることを示す。						

姪浜遺跡 4

福岡市埋蔵文化財調査報告第1209集

2013年3月22日発行

発行 福岡市教育委員会

〒810-8620 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 田堀印刷(有)

〒810-0045 福岡市中央区草香江1丁目8番24号